

第22回 アジア・フェスタ in WAKO 2026 ～オンライン講座週間～

アジア研究の歴史が長い和光大学の教員有志が「アジアを軸に有機的関係を構築しよう」と始めました

10月5（月）～9（金）	19:00-20:30 オンライン講座①～⑤
10（土）	13:00-14:30 講座⑥（対面）
	15:00-16:40 映画『鹿の国』上映会
	16:45-18:15 講座⑦（対面）

10月5日（月） 19:00～20:30 オンライン

講座①「インドネシアとネパールの災害から学ぶ教訓：予知・対応・防災教育の視点」

インドネシアやネパールで深刻な自然災害が相次ぐ中、災害を不可抗力と諦めず、事前予測や初動対応を改善する視点が不可欠です。被害を最小限に抑えるには「防災教育」の充実が欠かせません。従来の避難訓練にとどまらず、災害メカニズムの理解、日頃の事前準備、行政の教訓や予算の検証、子どもが楽しく学べる体験型学習など、包括的な学びが必要です。知識の習得から行政の監視まで幅広く教育に取り入れ、社会全体の防災力を高めることが求められています。

●講師：バンバン・ルディアント氏（和光大学経済経営学部教授）国連地域開発センターや海外経済協力基金（現JICA）、アジア防災センターでの実務に加え、コーネル大学で東南アジア研究員を務めた経歴を持ちます。現在はインドネシアにおける防災教育や防災ITの研究、JICA事業等を推進。毎年約30名の学生を現地へ引率し、「防災教育」をテーマとした実践的な指導に取り組んでいます。



10月6日（火） 19:00～20:30 オンライン

講座②「2026年グラミー賞受賞～世界におけるダライ・ラマ法王の存在とは」

2026年2月第68回グラミー賞で、アルバム『メディテーションズ（Meditations）』により「最優秀オーディオ・ブック、ナレーション&ストーリーテリング・レコーディング部門」の受賞を受け、ダライ・ラマ14世（90歳）は「個人の成果ではなく、世界平和や人類の共有する責任への評価である」と語りました。1959年、チベットの最高指導者ダライ・ラマ法王14世がインドへ亡命し、当時のチベット人口600万人のうち、約7万人がインドへ脱出することができました。インドのヒマチャルプラデシュ州の小さな町ダラムサラでチベット亡命政府が樹立されてから今年で70年になります。

本講演ではチベット人から見たダライ・ラマ法王14世の存在と、仏教だけではなく全世界におけるダライ・ラマ14世の存在についてお話しします。またダライ・ラマ14世が「自身の死後も輪廻転生の制度を存続させ、後継者を選ぶ」と表明している次のダライ・ラマ法王継承などについても語ります。

●講師：リンジン・ドルマ・ギャリ・野口氏（和光大学非常勤講師、チベット文化研究所理事ほか）：チベットカム地方領主の娘として生まれた。1959年中国の侵略により14世ダライ・ラマ法王がインドに亡命した後を追ひ、家族でインドに亡命。インドで教育を受け、日本に來日40年経過し二児の母。現在、チベット文化研究所、チベット教育福祉基金非営利理事、1997年より和光大学非常勤講師として現在に至る。それ以外にチベット語講師として活動中。



10月7日（水） 19:00～20:30 オンライン

講座③ 「不屈の地域イノベーター～プロレスと町田の里山農業で紡ぐ絆」

プロレスラーとして世界で闘うも大病や怪我で満身創痍に。しかし2026年、心腎サバイバーとして奇跡の復帰を果たす。本講座では不屈のライフヒストリーをベースに、プロレス・ビジネス・農業の領域で可能性を追求する挑戦者として、地域を活性化させる活動を熱弁。特に町田市小野路の多世代が集う循環型体験農園の現場から、人と地域を元気にするコミュニティの作り方を提案します。和光で培った自由な精神を原点に、挑戦しつづける姿勢と自らの手で未来を切り拓くバイタリティを伝授。限界を超え一歩を踏み出す勇気を与える講座です。

●講師：梅沢 菊次郎氏（プロレスラー／地域活性イノベーター）：2003年デビュー。海外で王座を獲得するも、2004年眼球負傷、2015年難病IgA腎症（透析・腎移植）、2025年心筋梗塞と絶え間ない命の危機に直面。2026年、心腎サバイバーとして世界初の奇跡の復帰を果たした可能性を追求する挑戦者。絶望を乗り越え挑戦しつづける経験から人間の限界を超え、現在は自然農法による農業チャレンジやビジネスを通じた地域コミュニティ活性化に奔走。伝統的里山文化と食と大地の循環に向き合い、次世代教育と地域活性化を推進中。



10月8日（木） 19:00～20:30 オンライン

講座④ 「介護現場を支える外国人たち～急増の背景にある日本社会の課題」

いま介護現場で働く外国人が急増しています。ベトナム、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、ネパールなど、おもにアジア諸国から来た人々はきわめて献身的で優しく、日本語にも対応し、現場の評価は非常に高いものとなっています。しかしその背景には、人手不足や、介護業界で働く日本人のモチベーションの低さもあり、さらに探っていくと高齢化社会の抱える構造的な問題も見えてきます。また外国人

を受け入れる施設の苦勞、地方から都市部への外国人介護人材の流出といった課題も次第に大きくなっています。さまざまな介護現場を取材し、見聞きしてきたことをお話できればと思います。

●講師：室橋 裕和氏（ジャーナリスト）：1974 年生まれ。週刊誌記者を経てタイに移住。現地発の日本語情報誌に在籍し、10 年に渡りタイ及び周辺国を取材する。帰国後はジャーナリストとして活動。現在は日本最大の多国籍タウン、新大久保に在住。外国人コミュニティと密接に関わり合いながら取材を続けている。メディアやトークイベントなどで講演する機会も多数。武蔵野大学非常勤講師。おもな著書に『カレー移民の謎』（集英社新書）、『ルボ新大久保』（角川書店）、『エスニック国道 354 号線』（新潮社）、『日本の異国』（晶文社）など。



10月9日（金） 19:00～20:30 オンライン

講座⑤「ネパールの仏舞と日本の仏舞～海からもたらされた密教修行法へ思いを馳せて」

日本より遥かに古い仏教の歴史があるネパールやチベットでは僧侶たちが教義に基づいて舞い、舞うこと自体を修行としている。一方、日本では日本海沿岸から三河、遠州などで 800 年以上続く「仏舞」や仏教由来の舞がある。日本の仏舞もそもそものは奉納としての舞うのではなく教義を学ぶ修行として舞っていたのではないかと。自身が日本初導師として舞っている修行としてのネパール仏教舞踊チャルヤー・ヌリチャと、各地で見聞した仏教舞との関連に思いを馳せる。

●講師：岡本 有子^{しんゆう}（真宥）氏（和光大学非常勤講師、ネパール舞踊研究、通訳・翻訳、尼僧）：8 歳～モダンバレエを経て 18 歳でバリ島にてバリ舞踊を学びバリ舞踊団所属。標高順に地球を巡って世界じゅうの民族舞踊習得をしようと、まずは 1985 年ネパールへ初渡航、山村ホームステイで舞踊を学ぶ。さらに舞踊の原点を探りに行ったインドネシア領パプア州でカルチャーショックを受け一旦舞踊を辞めるが、一年後ネパール舞踊一筋を決意、ネパール舞踊研究開始、日本初ネパール舞踊家となりネパール王立劇場、大阪花博など各地の舞台を踏む。ネパール国立女子大舞踊科留学時、故ビレンドラ国王より表彰。『ネパールを知るための 60 章(共著)』など。ネパール仏教舞踊に出会い尼僧となる。「日本人一人残らず一生に一度はネパール舞踊を踊らせたい」をモットーに指導したのは一万五千人超え。2025 年大阪万博でもネパール代表としてネパール仏教舞踊を舞った。



10月10日（土） 13:00～14:30 対面講座

＊12:30 受付開始 ＊会場：和光大学 D棟 109 教室（予定）

講座⑥ 「アジアの中の神道と土葬 ～鳥居、神社、神道はどこからきたか？～」

タイのアカ族には神社の鳥居とそっくりな門があり、木の鳥が上に居る。韓国のソッテ（鳥棹）の鳥も弥生時代の鳥形木製品と瓜二つ。始原の神社に建物はなく、沖縄の御嶽（うたき）や韓国の堂（タン）などと同様、岩や山や森が聖所だった。神道の行事や儀式の多くは明治以降に創られ、二礼二拍手一礼の参拝法も 1960 年代以降に民間の宗教団体が創ったもの。かつて土葬が主流で火葬を忌避した福島や茨城でさえ今や土葬は難しい。建御名方の弟神を祀る神社の末裔で墓穴掘りや神葬祭の神楽も経験した世代として、見えにくい「神道」について考えてみたい。

●講師：関根 秀樹氏（和光大学非常勤講師）：多摩美術大学「絵の具実習」講師。和光大では「火と人間の文化史」「音と楽器のミンゾク学」を担当するが、実は2万5千冊以上の本を読んできた文献学派。各地の美術館などで分野横断的な多彩なワークショップを展開。「タモリ倶楽部」ほかテレビ出演も多く、坂本龍一とNHK でセッションも。火起こし世界チャンピオンなど不思議な肩書も多い。『焚き火大全』『新版 民族楽器をつくる』『縄文生活図鑑』『刃物大全』『自然と神道文化』など60冊以上の著書がある。



10月10日（土） 15:00～16:40 ドキュメンタリー映画『鹿の国』上映会

＊14:30 受付開始 ＊会場：和光大学 E棟 101 教室

16:45～18:15 弘 理子監督 対面講座

映画『鹿の国』…日本最古の神社の一つ、諏訪大社。年間 200 回を超える祭礼は謎に満ちている。重要神事で降ろされる古い神・ミシャグジ。神事に欠かせない鹿の生贄。四季の祭礼を追ううちに、「いのちの循環」への原初の祈りが浮かび上がる。そして、長らく畏怖と謎に包まれてきた中世の「御室神事（みむろしんじ）」の再現に挑む。厳冬の3カ月間、神域の穴倉に籠められた生き神・少年大祝（おおほうり）の前で繰り広げられた芸能とは？



講座⑦ 「アジアの生き神さま～幼き命が持つ聖なる力」

映画『鹿の国』は長野県・諏訪地方を舞台にしたドキュメンタリーですが、この作品にはヒマラヤの国ネパールの文化と響き合う要素が数多く見られます。

動物の生贄、神仏習合、そして生き神の存在——これらは一見すると異なる文化の産物のようでいて、実は深いところで共通の祈りの構造をもっています。なぜ子どもが聖なる存在として崇められるのか。その背景をたどりながら、“いのちの循環”という普遍的な祈りについて考えます。

●講師：弘 理子氏（映画監督）：日本とヒマラヤ周辺をフィールドにドキュメンタリーを制作。ヒンドゥー教の供儀に迫った『デヴォキ・神に捧げられた女たち』、塩の交易路に密着した『少年と子ヤギの大冒険・ヒマラヤ越え 300 日塩の道』、カイルス巡礼に同行した『巡礼・世界の聖地』（ニューヨークフェスティバル・宗教番組部門 銅賞受賞/2000）。『築地市場大百科』（放送文化基金賞・エンターテインメント部門 本賞 受賞/2009）。『ワイルドライフ』『カラース・オブ・アジア』『にっぽん百名山』シリーズなど NHK の番組も多数制作。



■お申込みについて（下記のリンク「お申し込みフォーム」からお申込みください）

<https://forms.gle/U9MgVQJQjvgoue3T9>

※すべて無料です。（映画上映会はカンパも歓迎）

※講座は一つ～全て、いくつでもご参加申し込みいただけます。



■お問合せ：和光大学アジア・フェスタ in WAKO 2026 世話人会

E-mail : asiafesta@wako.ac.jp